

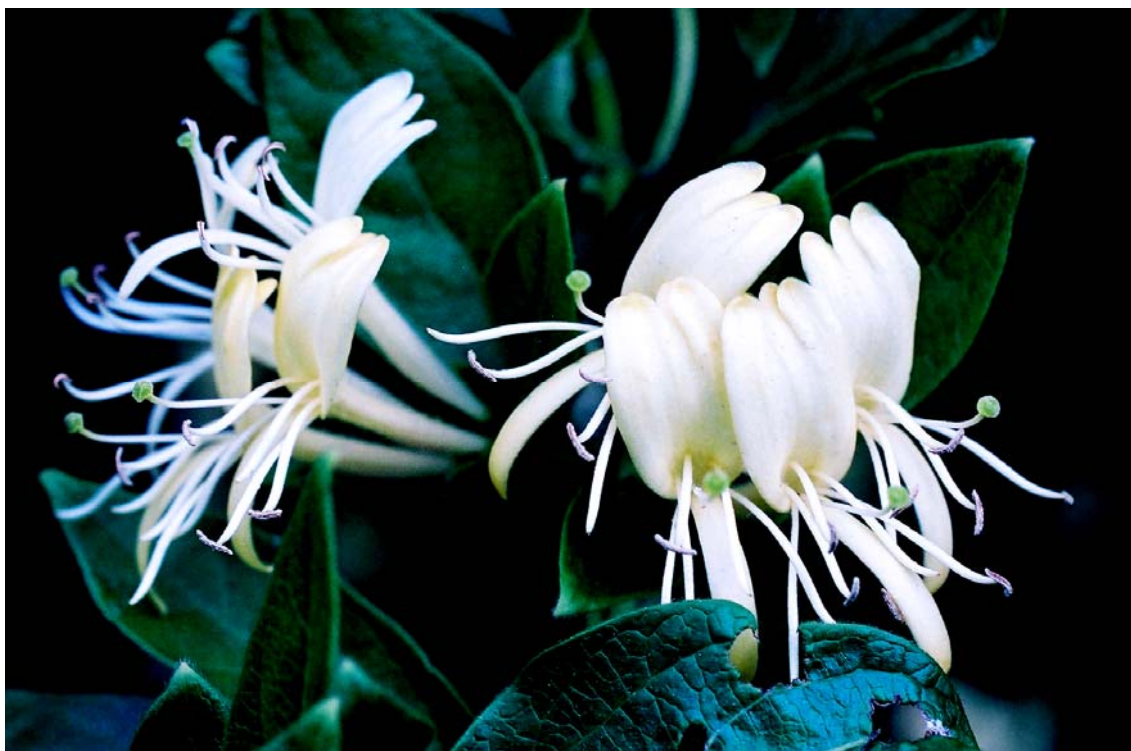
4) スイカズラとツキヌキニンドウ／ニンドウ＝忍冬

スイカズラはスイカズラ科の常緑ツル性木本で、日本各地の山野に自生する。この仲間は世界で150種ほどが知られており、北半球を中心に分布する。初夏、白い花を2輪ずつ咲かせ、花には強い芳香がある。細長いラッパ状の花は先のほうが5裂し、4片が上向きに、残り1片が下を向いて開く。花は咲き進むと黄色にかわり、あたかも2色咲いているように見える。このため中国では『金銀花』といわれている。和名のスイカズラの由来は、長い筒状の奥には蜜があり、吸うと甘いため、別名の『忍冬』は冬も葉が落ちないところから、冬を耐え忍ぶという意味でつけられた名称である。このため『シヌビカヅラ』という地方もある。他にも『甘茶』などと呼ぶところもあり、甘味料の乏しかった時代、貴重な植物だった。奈良時代の記録に見える『甘葛』(アマズラ=01-07-04 椿の項参照)は、ツル甘茶であるともいわれており、この植物の近縁種であったと思われる。

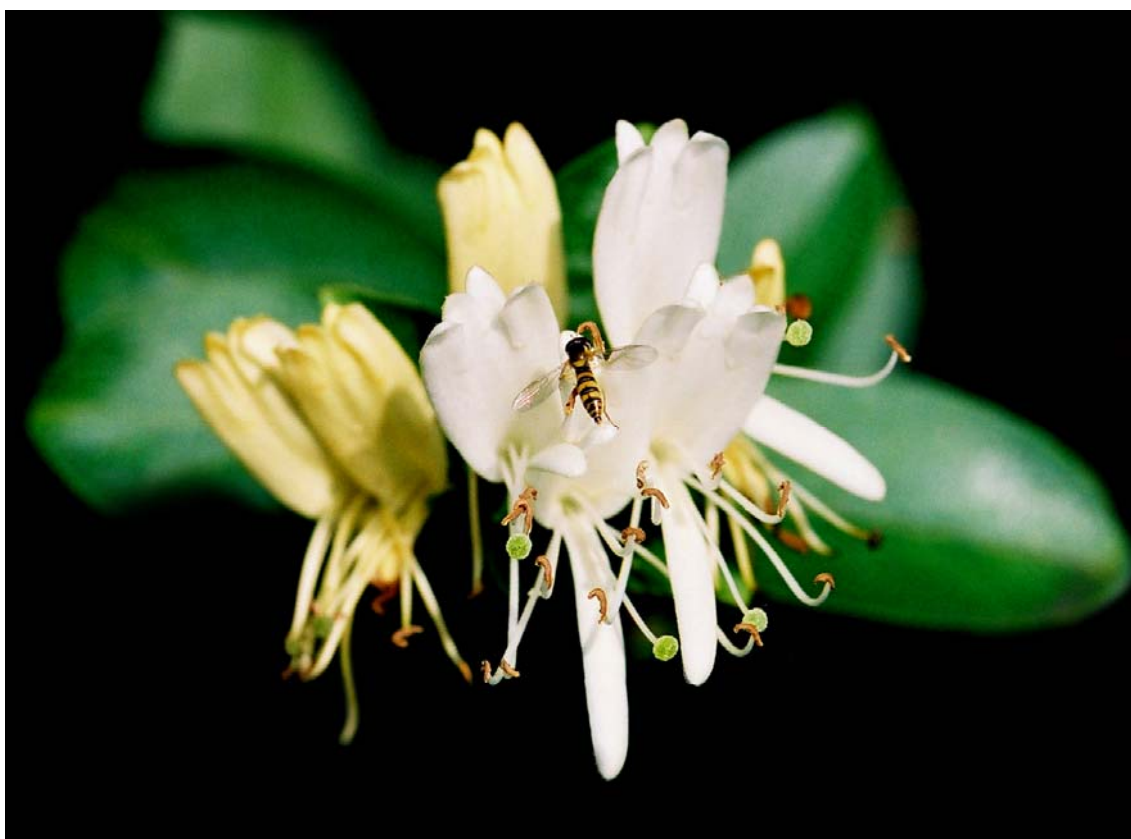
イギリスではスイカズラのことを『Japanese honeysuckle』といい、まさに和名の由来をそのまま訳したものとなっている。欧米では日本や中国から持ち帰ったものが野生化し、つる性であるためもあって、今では雑木として嫌われている。学名は『*Lonicera japonica*』で、属名は植物採集家の名前に因む。

漢方では開花期に摘んだ花を乾燥させたものを『金銀花』といい、花には脂肪酸やフラボノイドなどが多く含まれている。これは関節の痛みや風の解熱、利尿などに良いとされている。また葉を乾燥させたものを『忍冬』と呼び、タンニンを多く含んでいるために『忍冬茶』として茶の代りに飲用する。忍冬にはこの他にもサポニンやフラボノイドなどが含まれており、腫物や口内炎、湿疹、かぶれなどに良い効果が得られる。また浴湯料として利用すると、神経痛や痔疾の痛みにも良いといわれている。『金銀花』と『忍冬』を酒に浸して『忍冬酒』として飲むこともあり、昔から滋養強壮に良いとされてきた。

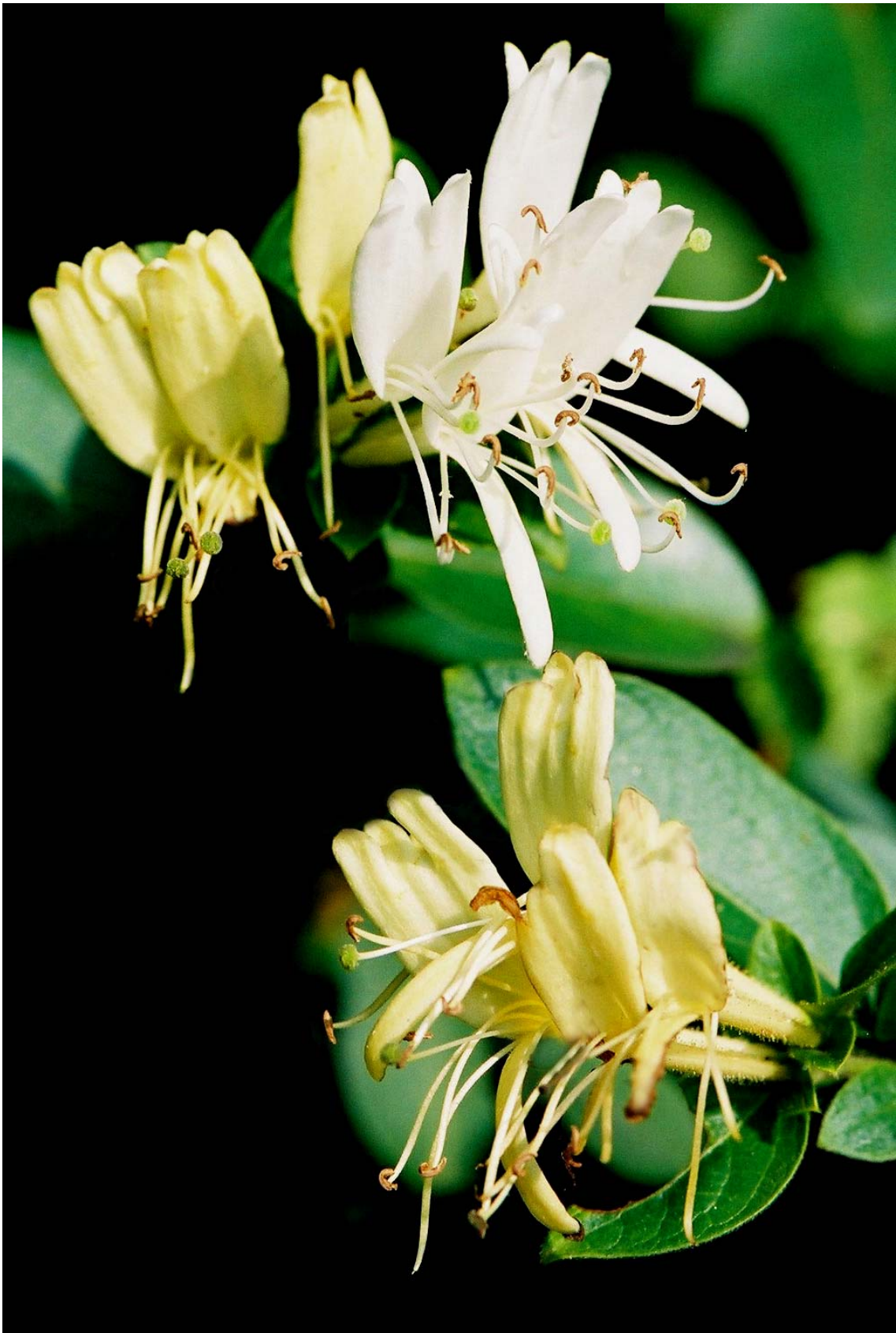
古代エジプトの装飾文様の一つに『忍冬文』がある。これはギリシャ、西アジアを經由して中国に伝わり、さらに日本に入って正倉院御物や法隆寺の透かし彫り金具などにも見ることができる。この文様は長い年月をかけて、ほとんど地球を半周したことになる。一方北アメリカには同じ仲間で、オレンジ色の花を咲かせる『ツキヌキニンドウ』が自生する。ツキヌキといわれる理由は対生する葉の基部が合着して1枚の葉になり、その真中から花穂が出るためである。明治の中頃に日本に渡来し園芸用に植えられ、初夏から秋にかけて美しい花を咲き続ける。最近ではこのツキヌキニンドウの黄花種や、スイカズラを淡桃色にした『桃花スイカズラ』なども改良されてよく販売されている。どれも挿し木で殖えるので3月のお彼岸頃か、新芽の固まる梅雨の頃に挿しておくのが良い。水捌けの良いところであれば、すぐに大きくなって花を咲かせてくれる。



咲いたばかりのスイカズラの花は純白で芳香が漂う。砂糖がまだ乏しかった時代、この花の蜜を吸って糖분을補給していたために「吸い葛」になったという(埼玉県川島町)。



咲いてから数日が経つと、花卉は黄色に変化する。「金銀花」といわれる所以である。



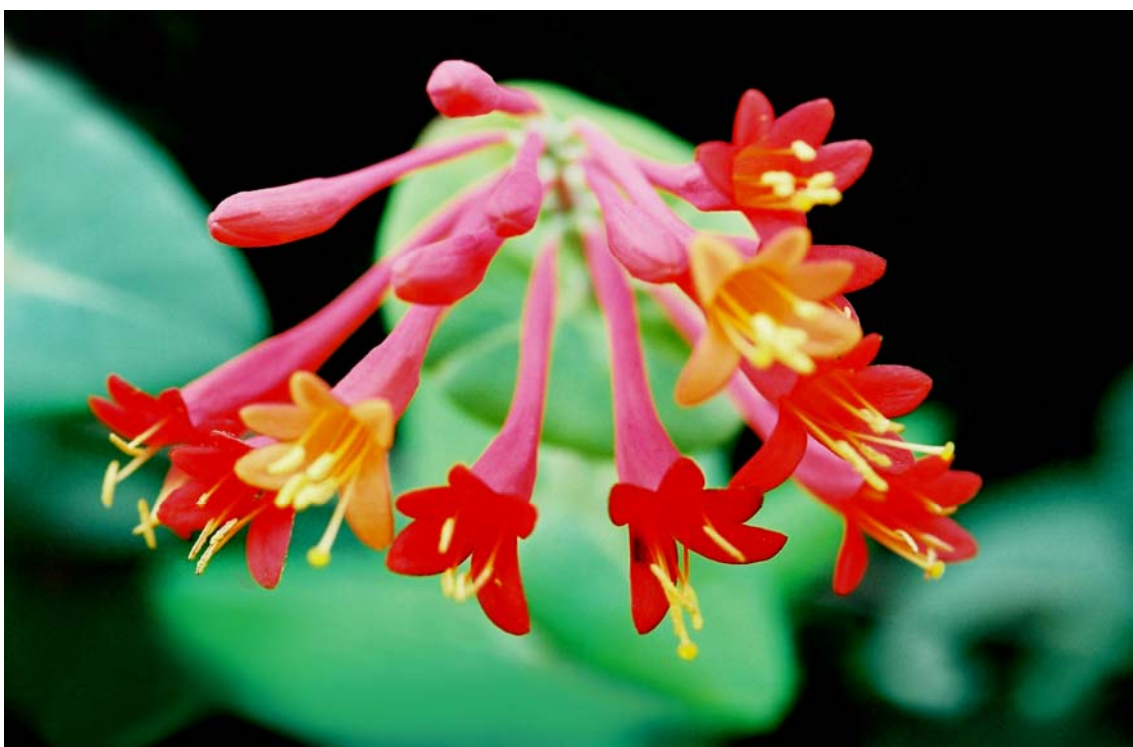
まさに金銀花である(埼玉県川島町)。



紅花スイカズラはスイカズラの変種である。花を茶碗に入れて熱湯を注ぎ、これを飲用すると、風邪や冷え性、利尿、解熱などに効果があるという(東京都小平市薬用植物園)。



紅花種も数日経つと花卉は黄変してくる(東京都小平市薬用植物園)。



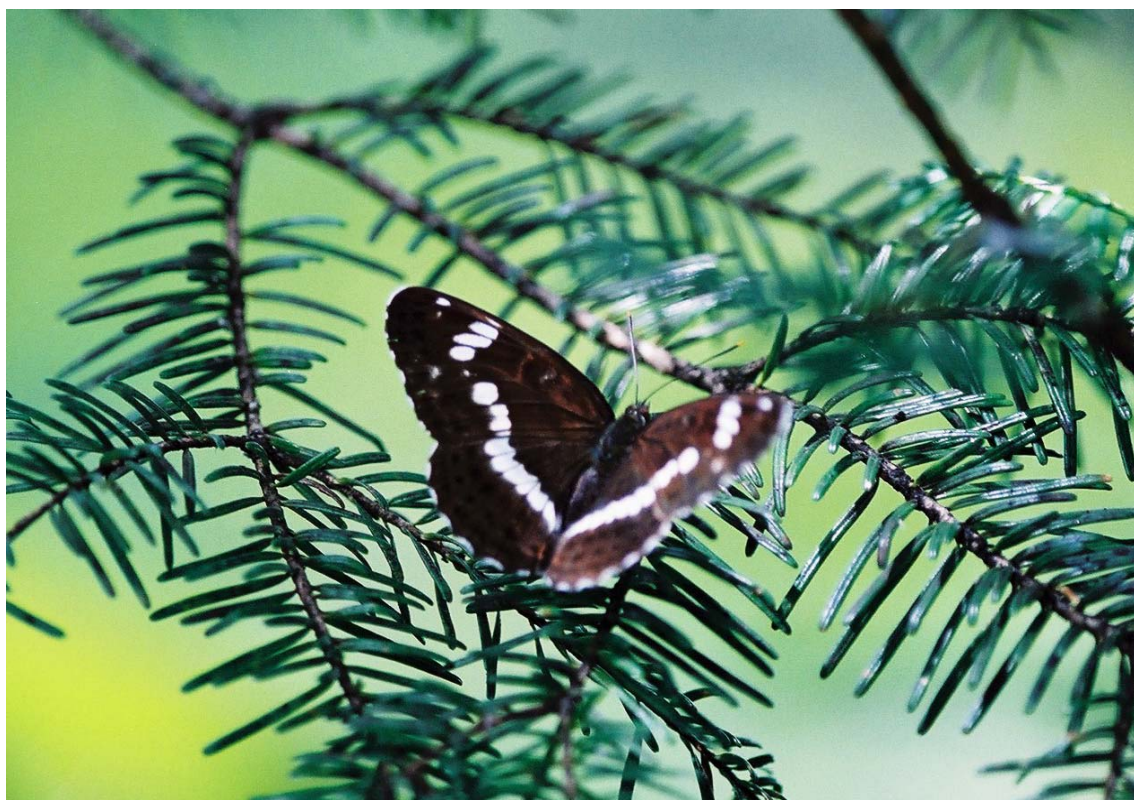
ツキヌキニドウ、北アメリカ産のこの花は朱赤色の花がよく目立つ。しかしスイカズラのような強い芳香はない。神様は二物を与えなかったようである(さいたま市浦和区)。



ツキヌキニドウの赤い花、半円形にきれいに咲いている(東京都小石川植物園)。



ツキヌキニンドウの果実。スイカズラは黒紫色の果実が実る(さいたま市浦和区)。



ニンドウやツキヌキニンドウを食樹として育つイチモンジチョウ。平地でも低山地帯でも普通に見られる蝶だが、白と黒の紋様が、キリリと凛々しい(蓼科高原)。 [目次に戻る](#)